

記憶の手触りについて

仕事柄、いろいろな土地を旅してきた。

パリのマルモッタン美術館へ続くゆるい坂道、バルセロナの市庁舎前の広場から細く伸びる血管のような裏路地、ドレスデンの穴ぐらのようなレストランの大きなテーブル、ニューヨーク・クイーンズ地区のほこりっぽい国道沿いの店のショーウインドウ。気に入って何度も訪れることになる場所もあれば、ここには二度と来られないだろうと初めから知っているような場所もあった。そのすべての記憶の中で、一瞬で過ぎ去っていくことほど、不思議とより色濃く残っているのはなぜだろうか。すれ違う人の瞳の色、店の人と交わした何気ない会話、振り返った夕方の空の色、そのどれもが、再びその場所を訪れたとしてももう二度と出会えないとわかっている景色だ。

伊藤藍の作品（City シリーズ）は、作家が日常や旅のなかで捉えたさまざまな風景を、織りによって組み合わせることで構成されている。一見するとひとつの大きな絵画のようにも見えるその画面は、さまざまな時間や場所、人物や建物を描いたピースが連なって形作られる。異時同図的なコラージュは、画面の縦横に空間と時間の拡がりを生み出す。そこに異なる高さの視点から捉えられたモチーフが挿入されることにより、平らかな印象の画面にアクセントが生まれる。

展覧会タイトルにもあるように、これらの作品は作家が旅先から持ち帰った記憶によって紡がれている。その紡ぎ合わされたあらゆるピースに、何気なく、だからこそ忘れがたい、あの時あの場所の誰か、そして私が生きていた時間を見ることができる。どこにも記録され得ないと思っていたもう戻らない瞬間が、たしかに質量を持ってもたらされていると感じるのは、それが織りという、テクスチャーの縦横に時間を含んだ多層的な構造をもつマテリアルによって表現されていることと無関係ではあるまい。

今この日常を生きる私と、あの旅を生きていた私は、この画面のごとくたしかに地続きである。しかし旅の記憶をたどる時、わたしはいつも、これまでに歩いたあらゆる街に残してきた自分のかけらを通して、忘れがたい景色を繰り返し見ているような感覚にとらわれる。それら私のかけらは、いまこの日常を生きる私が選ばなかった、あったかもしれないそれぞれの場所での生活を、それぞれに生きてくれている存在でもある。その存在に、この作品を通してふたたび出会う時、記憶には確かな手触りが与えられるだろう。

町田 つかさ／和泉市久保惣記念美術館学芸員